春陽會ニュース

自由に考察

(A)　上野春香

「監獄に自由はない
資本主義社会に自由はない
真の自由は自然の中にある
……これは伊南画映画。自由を求めて、このポスターに、大きくこう書いてあった。……

……ポスターを眺めて、少しの風にはビクともしないように、何かをピンで留め、名残りとりどりの池のポスターを眺めて、愛々と私のいつも来る停留所の壁に張りつけてあった。

私はそうだ、一はそれに違いないと思った。二も多分はそうに違いないと思った。三は必ず確に、そうだと思った。しかしよく考えているうちに、この三にはそう簡単に解しきれない深い意味があることが分かって来た――そこにさっきから停っていた電車が来たので私はそれを中止した。

(B)

4の文章と、これから書く5の文章とは特に関係はない。

私は風景の中に(又は風景の中に)風景を立てる。何をどう風景こうと私の自由である。しかし出来た作品のことごとくが美術品でない事は論をまたぬ。

その作品を春陽会に出品すれば、春陽会は春陽会の照準で審査を見る。そして春陽会の先輩にかけて二通りの通る目があると思う。

一つの目は真実な精神的に美しく結晶した者を通す目であり、一つの目は近代近型美学の理論を身を以って実践した者を通す目だ。

前者に子供の純情さ、そこまわれ人間の献身の美しさがあるとすれば、後者には大人の理性と知性の美学がある。一は口語体の文章であり、一は文章体の文章である。

美味と酒に甘口と辛口とがあるのと似ている。

一は抒情的であるとすれば、一つは抒情的である。然し抒情的な場合でも絵具の前に自分がある。然し抒情的な場合でも絵具の前に自分がそこに在ると云うことだ。抒情的な場合でも絵具の美人は自分であると云う事だ。ここで見方には何人かやっぱり強く太るものと前者は後者を、後者は前者を喰う事だ。

よき文章体の文章を作るには良き口語体の研究が必要だ。抒情の精神の上に初めて良き造型が成立つことを思う。そして又近代に生きている我々に近代精神を抒情の絵具は意味がないだろう。

而して時代が変って行くことに、前者、後者のスタイルが変ってゆく。芭蕉の云う流行だ。世紀から世紀の進歩がそこにあり、今日より明日の発展の楽しさがそこにある。

我々は風景を風景の中に(又は風景の中に)立てる。何にきとう揃うと我々の自由である。その自由の中にこそ我々画家の生涯がある。而して画家の自由とは、最もきびしく最も美しき、歓の如きその真実に、身を以て出来てゆくことである。

特別寄稿

油絵具研究室より

桐生　春雄

私が油絵具の研究に従事して早ざ足掛け四年になります。其の間に春陽会の木村、岡、田川、三雲、中谷其の他の諸先生や山下新太郎先生に多大の御支持を頂き、感謝致す私に対し、分で出来ました事を深く感謝いたして居ります。研究室の油絵具研究同僚として東領郎君、三人其他研究同僚として湯本迪男君を始め松田実孔明主研究所のメンバーと致して居ります。

油絵具の歴史上の問題上、松田孔明氏は研究室でつくられた

彼等は去られて居ります。研究は絶対秘的なもので飛躍なく内容は進歩しているものです。即ち研究は文で終ったと云う事はないのです。

私達は皆さんの油絵具をより美しくより永久性を附与するためにいつも心を砕いて絵具を愛し、二人を絶対に離さないわけです。

いろいろを今の世の中の実用から時には思いもよらぬこともあるかも知れません。又変化をみるものもあろうと思います。しかし、私達はいつもこれらの事について眼を放けて離したことはないのです。それは私達の又大きな責任でもあります。

私達のつくった絵具を御使用の上御覧なさいます。どれは皆さんかいろ使用を生みたした時の歴史と同じことです。技術家と文芸家は共に心は同じです。

やはり情熱を愛し、美しき、自然の姿を貫くことには見行をとりません。そして皆様が油絵具について変化したり、作品は時別の設備が起きたり、何んの時につくって欲しいものがあったり、少しでも眼の点検時には遠慮なくご用命の国立る訪れて下さい。私達は研究室でいつも大歓迎するでしょう。

私達も春秋には本当にさやかな感覚を聞きます。是等の感覚をつて下さい。

私は油絵具及び研究所はシカナフ、パテの研究に余念がありません。又一生懸命皆さんの為にやりたいと思います。たとえば教場での絵具のパンフレットは実に研究室で最も誇りとしたものです。